

# 内モンゴルにおける観光地域に関する地理学的研究

陳長江

キーワード：内モンゴル，観光地域，観光資源，地域振興

## 1. はじめに

近年、観光が世界中の目を引いている。国際観光収入は世界輸出の中でトップにたち、すでに石油、車などの産業を超えている。観光業は宿泊業、交通業、土産品業、飲食業、娯楽業などへの直接経済効果と生産所得効果、雇用効果、消費浸透効果、租税効果、地域産業振興効果などへの間接社会効果をもたらす。これらの効果に注目し、日本はじめ、世界各国、各地が観光立国や観光振興を目指したさまざまな活動を展開している。こうした世界の流れの中、途上国である中国の観光業の発展はもっとも急速である。UNWTO の最新の予測では、2020年、中国が世界一の観光目的地、世界4位の観光客輸出国となっている。このような観光業が盛んになっている中国の一部である内モンゴル自治区では、観光業が地域経済発展や雇用産出など多面的に期待されている。

内モンゴル自治区は中国北部に位置し、北緯  $37^{\circ} 24'$  ~  $53^{\circ} 23'$  , 東経  $97^{\circ} 12'$  ~  $126^{\circ} 04'$  に広がり、総面積は約 118.3 万  $\text{km}^2$  (日本の面積の約 3 倍に相当する) で、中国全国土面積の 12.3% を占め、面積は新疆、チベットの次で 3 位にある。北東から南西へのびる細長い形で、東端から西端までの距離は約 2,500km、南北の直線距離は 1,700km である。東部、南部、西部は黒竜江省、吉林省、遼寧省、河北省、山西省、陝西省、寧夏回族自治区、甘肅省の 8 省・自治区と隣接し、北京、天津の省級都市に近接している。

内モンゴル自治区は、中国で最初の民族地域自治の自治区である。2009 年の総人口は約 2413.7 万人である。内モンゴルは、フフホト、バウトウ、ウーハイ、チフン、トンリャオ、オールドス、フルンブイル、シリンドル、ウランチャブ、バヤンノール、シンアン、アラサンなど 9 つ地級市 (地域レベルの市) と 3 つ盟から構成された。それら地級市と盟はまた 52 つの旗、17 つの県、11 つの盟 (市) 轄県級市、21 つの区により構成している (図 1)。

近年の中国では、中央政府の国策、経済発展や地域変化などにより地方行政機構の再編が進んでいる。その勢いで内モンゴル自治区に、多くの地域で遊牧生活から定住農業や工業に従事する生活へと変化し、都市化が進み (統計によれば、1985 年都市人口が総人口の 43.4% から 2008 年の 51.7% までに増加した) 、都市とその周辺に生産と消費が集中する傾向にある。

また、工業化も進み、第 1 次、第 2 次、第 3 次産業の比重が 1985 年の 32.7:34.8:32.5 から 2008 年の 11.7:55.0:33.3 へと変わり、第 2 次産業の発展が顕著である。経済発展をとめない、生活水準がアップし、観光需要が喚起され、観光業が発展している。

本研究の目的は、内モンゴルにおける観光地域に関して、これまでの発展経緯、地域的、社会経済的特性を分析し、そこに存在する問題を明らかにすることである。そのうえで、今後内モンゴルにおける観光のあり方を展望する。

## 2. 内モンゴル観光資源の分布

内モンゴルは、大草原をはじめ、森林、湖沼、古跡、砂漠、山岳、高原および民族風情などの数多くの観光資源をもっている。内モンゴルの観光資源の特徴について、内モンゴル観光局の資料を用いて検討する。同資料によると内モンゴルにおいて276件の観光資源が確認された。そのうち142件の自然観光資源と134件の人文観光資源が約均一に内モンゴルの12の市、盟に分布している（図2）。

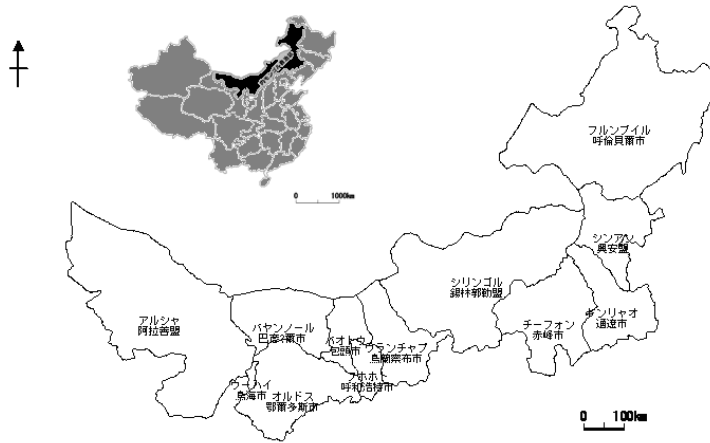


図1 内モンゴル行政区分  
出所 筆者作成

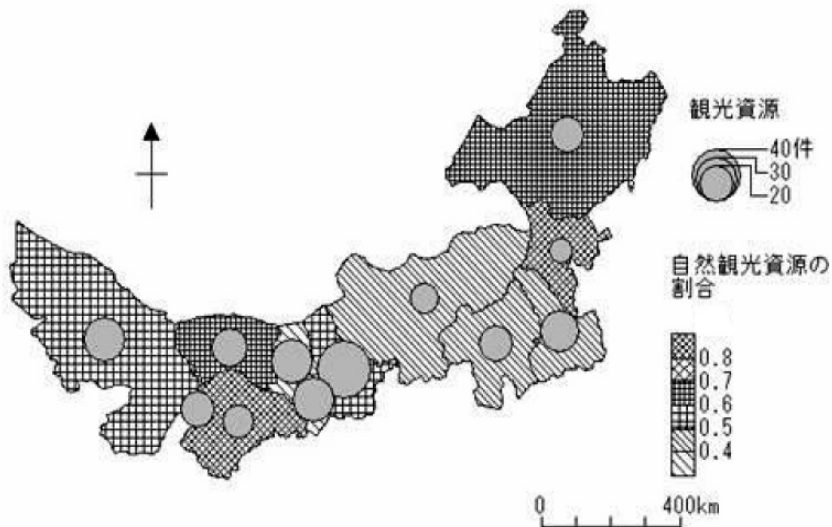


図2 観光資源の分布  
出所 筆者作成

図2が示すように、内モンゴル東西の観光資源のうち、自然観光資源と人文観光資源との比率に大差がある。ウランチャブ市より東は自然観光資源の割合が大きく、フフホト市、バオウトウ市より西では人文観光資源の割合が大きい。

内モンゴルの西部に砂漠、草原と歴史文化遺跡などの観光資源が集中分布し、中部には都市圏観光資源が集中分布している。また東部に草原、民俗と遼文化観光資源が集中分布し、東北部に森林、草原氷雪観光資源などが集中分布している。しかも、東西の各観光資源の占める割合が違い、西部に人文観光資源の割合が多い、東部に自然観光資源の割合が多いという特徴が見られる。

### 3. 内モンゴル観光客の動向

内モンゴル観光の国際観光客の市場を分析する際に、2003年から2009年の内モンゴル統計年鑑を利用した。表1が示すように、国際観光客はモンゴルとロシアからの観光客が約8割を占めており、続いて日本からの観光客も数多く訪れている特徴が見られる。滞在日数も連年増加する傾向が見られる。

観光客数の変動について、図3が示すように、2003年以降は、ロシアとモンゴルの国際観光客が年々増加する傾向が見られる。それは、内モンゴルで、2003年以降、内モンゴルでは、ロシアとモンゴルとの間に新たな税関を設けた結果だと推察できる。今日、内モンゴルは国境に19の税関を設け、中国の省・自治区のうち税関がもっとも多い地域である。税関の設置は、地域経済に貢献するとともに、国際間の観光客が出入りしやすくなり、観光への貢献が大きい。

表1 内モンゴルの外国人観光客と滞在日数の変動

	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
外国人観光客	439,405	413,639	799,861	1,001,635	1,232,468	1,494,500	1,549,328
日本	17,036	5,965	27,545	19,808	29,218	44,070	36,473
フィリピン	125	316	314	573	310	1,355	1,352
シンガポール	781	483	1,866	2,994	3,338	3,440	2,211
アメリカ	3,313	2,381	5,355	5,187	10,492	9,905	10,171
カナダ	729	745	1,553	3,393	3,920	4,152	3,942
イギリス	1,441	1,036	3,383	3,882	4,910	5,940	5,557
ドイツ	1,107	848	2,071	8,881	7,453	7,440	8,162
フランス	511	728	605	911	1,530	3,293	4,148
イタリア	749	356	934	2,340	3,267	1,844	2,363
スイス	210	248	124	179	1,069	840	991
オランダ	121	119	208	279	88	325	226
オーストラリア	1,143	909	1,330	2,448	3,117	4,642	4,938
ニュージーランド	363	244	295	317	430	390	409
ロシア	134,732	146,521	361,722	484,033	536,890	608,720	615,780
モンゴル	256,079	241,809	347,435	444,270	577,154	734,341	787,029
香港・マカオ在住中国人	5,149	2,739	8,770	6,628	9,012	19,884	20,026
平均滞在日数(日)	1.81	1.81	1.90	1.69	2.02	2.75	2.77

出所 内モンゴル統計年鑑 2003～2009年各版より作成

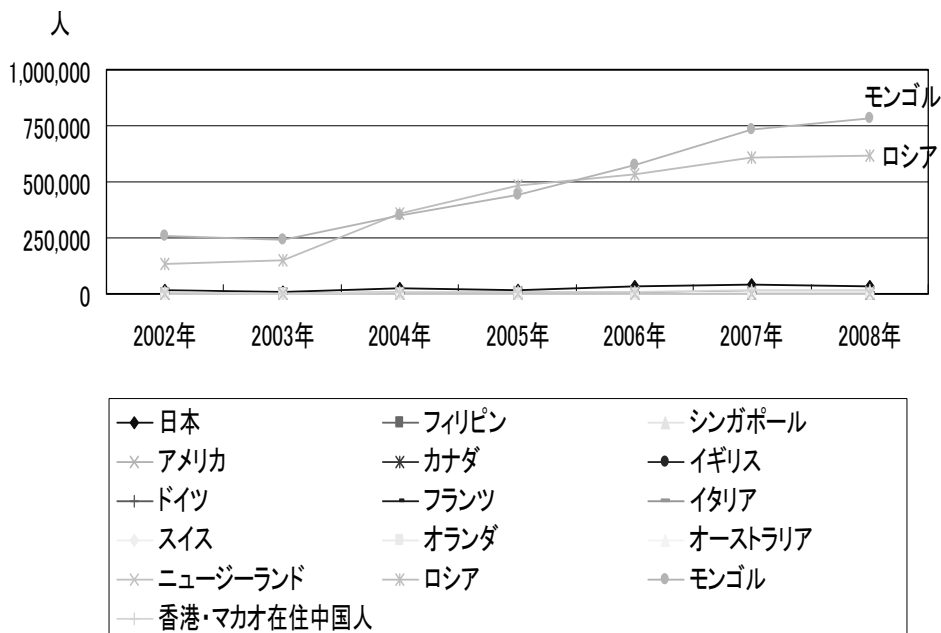


図3 観光客数変動  
出所 筆者作成

#### 4. 内モンゴル観光に存在する現代的問題

内モンゴルの観光が観光収入や雇用創出など社会・経済的面において大きな意味をもつ。しかし、内モンゴルの観光には以下の六つ課題が存在している。

1つ目は、観光発展の地域格差が著しいことである。表2で示しているように、フルンブイル市、シリンゴル盟は圧倒的に観光外貨収入が多く、ウランチャブ市、ウーハイ市、シアン盟は観光外貨収入が少ない状態であり、観光発展の激しい地域格差が見られる。

2つ目は、交通整備が不十分なことである。図4が示すように、自動車道路の整備によって、国内観光客が増加しているように見られるが、実際に観光地域へアクセスする専用の道路整備がまだまだ不十分である。航空路不備の原因で、国際観光客が内モンゴルへのアクセスが困難である現状である。

3つ目は、観光活動に季節的傾向が存在している。図5でしめしているように、該当地域では、7月から9月の夏季の間に観光客が多く訪れ、他の季節に観光客が少ないである。

4つ目は、政府から観光へ投資が少ない。表3が示すように、90年代政府主導の新たな観光資源の開発はほとんど行われていなかった状態である。

5つ目は、広告宣伝の不足である。内モンゴル観光のイメージは、昔の草原観光のイメージにとどまり、他の観光資源への認知度が低い現状である。

今日の情報化社会において観光に対し、重要な役割を果たす観光情報とインターネットについてについて検討した。内モンゴルの場合、それらへの関心が少なく、旅行会社や観光施設などによるウェブページの開設も少なく、そのため観光情報発信が少ない状況となっている。また従来からの草原観光地域としてのイメージが強く、ほかの観光資源は認識

されていないのが現状である。観光地域の宣伝やイメージ形成の課題については、内モンゴル政府も認識しており、宣伝映画を作製するなどの取り組みがなされており、その効果が今後期待される。

6つ目は、観光に携わる人材の不足である。内モンゴルには、観光専門学の科目を設置している高等学校はわずか3校である。毎年の卒業生が200名弱で、卒業生の就職率が100%に達し、内モンゴル観光産業のニーズに応えきれない状況である。

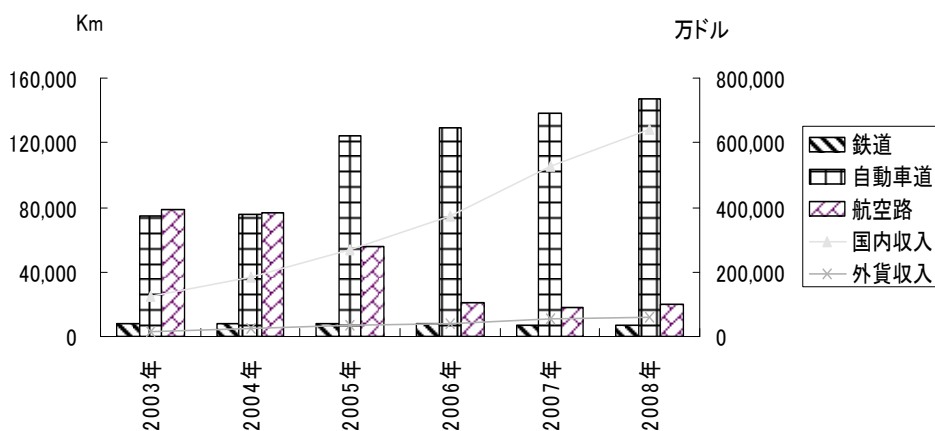


図4 交通機関の発達と観光収入の推移  
出所 内モンゴル統計年鑑2004～2009年より作成

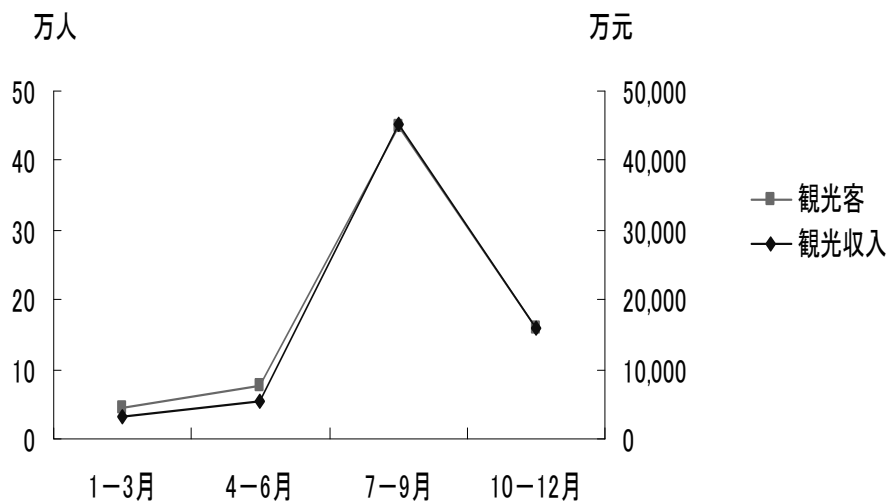


図5 アルシャン市温泉観光地域の四半期別観光客数（2009年）  
出所 アルシャン市統計局資料により作成

表2 各盟市観光外貨収入

市盟	2000年 万ドル	2001年 万ドル	2002年 万ドル	2003年 万ドル	2004年 万ドル	2005年 万ドル	2006年 万ドル	2007年 万ドル
フフホト市	546.00	390.00	577.63	355.34	955.61	1,491.91	2,781.79	4,352.93
バウトウ市	244.00	118.00	155.60	175.74	370.31	473.80	583.09	646.67
フルンブイル市	4,550.00	4,356.00	4,906.53	5,388.99	14,834.63	19,833.22	18,133.68	22,857.09
シンアン盟	12.00	5.00	3.00	9.03	22.71	82.20	110.93	257.01
トンリャオ市	10.00	32.00	33.37	18.68	95.36	287.85	312.34	530.72
チーフオン市	25.00	11.00	48.16	47.17	313.86	444.31	1,028.34	1,337.30
シリングル盟	6,997.00	8,472.00	8,693.34	7,440.90	7,526.46	11,247.14	15,613.56	21,952.12
ウランチャブ市	45.00	80.00	65.10	45.78	689.25	289.96	220.33	277.77
オルドス市	110.00	63.00	146.60	72.41	220.30	354.24	550.69	631.69
バヤンノール市	22.00	63.00	137.44	127.99	135.10	278.33	538.58	757.01
ウーハイ市			0.26	2.02	0.86	12.68	5.81	5.72
アルシャ盟	8.00	150.00	168.06	151.59	145.61	410.90	499.90	869.82

出所 内モンゴル統計年鑑 2003～2009年各版より作成

表3 内モンゴル各市盟の観光地域数

市盟	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年
フフホト市	13	13	13	14	14	15
バウトウ市	23	23	23	23	23	24
ウーハイ市	7	7	7	7	7	6
チーフオン市	9	9	9	9	9	9
フルンブイル市	11	11	11	11	11	10
シンアン盟	11	11	11	11	11	11
トンリャオ市	10	10	10	10	10	11
シリングル盟	5	5	5	5	5	5
ウランチャブ市	12	12	12	11	11	10
オルドス市	6	6	6	6	6	6
バヤンノール市	8	8	8	8	8	8
アルシャ盟	8	8	8	8	8	8
自治区	123	123	123	123	123	123

出所 内モンゴル統計年鑑 1995～2000年各版より作成

表4 内モンゴル旅行会社のウェブページ

地域	ウェブページ		ウェブページ上表示される言語						
	あり	なし	簡体字	繁体字	英語	日本語	ロシア語	韓国語	モンゴル語
ウランチャブ市	8	7	8	3	0	0	0	0	0
シリングル盟	11	14	11	2	2	0	1	0	0
ボウトウ市	18	58	18	8	0	0	0	0	0
シンアン盟	8	26	8	2	0	0	0	0	0
フフホト市	57	85	57	5	4	1	0	1	0
バヤンノール市	4	15	4	3	0	0	0	0	0
ウーハイ市	0	13	0	0	0	0	0	0	0
アルシャ盟	3	8	3	0	0	0	0	0	0
オールドス市	15	27	15	8	0	0	0	0	0
チーフオン市	22	44	22	4	0	0	0	0	0
フロンブイル市	20	70	20	5	0	0	0	0	0
トンリャオ市	12	8	12	4	0	0	0	0	0
計	178	375	178	44	6	1	1	1	0

出所 内モンゴル観光局資料により作成

## 5. おわりに

本研究を通じて、内モンゴル観光が現在かかえる課題は次のようにまとめられる。まず観光資源の特性によって観光客数の季節的偏りがみられ、その季節的偏りをなくするための工夫がみられないことである。次に観光開発の資金投下が少なく、交通機関や観光施設の不備が内モンゴル観光産業の大きなボトルネックとなっていることである。さらに観光市場の調査や考察が不十分であり、観光に関する情報発信が少なく、観光地域の宣伝や誘致活動が重要視されていないことも課題としてあげられる。観光に携わる人材の不足している。また政府や個人が観光に対する認識がまだまだ不十分であり、観光産業を地域振興の重要な柱産業として位置づけられていないのが現状である。

最後に、本研究で明らかにした点を踏まえて、今後の内モンゴル観光のあり方について5つの提案をする。

**ア** 内モンゴルの観光産業の発展には行政の関与が大きい意味をもつ。各観光地域へのアクセスを可能にする鉄道や自動車道、または空港などの交通機関の整備や各種の観光施設など観光産業が必要とする最低限のインフラストラクチャーの開発に必要な資金の額は莫大なものである。このような外資や個人の観光開発では担えない部分は、行政の指導で行われなければならない。また、外資や個人の観光開発者に実質上の優遇政策を施して、大きな観光企業を誘致し、全面的に支援することが必要とされる。

観光産業は、他の産業と密接な関係をもち、相互に影響する。たとえば、草原観光は、元の営みである牧畜業と密接に関係するため、観光開発と原地住民の間でのコンフリクトの解消は行政側から歩み寄る必要がある。また、観光資源の保全、環境保護などの面で、法律上の規制が必要である。さらに、観光産業の中の各部門の運営は、公平で、秩序が保たれるよう監督制度が必要とされる。

**イ** 観光資源、自然環境の保護を前提に、新たな観光資源を発掘し、持続的可能な観光を図るべきである。温泉の無制限の開発による源泉の枯渇、高速道路の建設による表土の流失、草原観光による表土の衰退など、観光開発や観光活動により観光資源や自然環境が破壊される問題があげられる。観光開発は単なる地域経済効果の側面だけでなく、観光資源や環境の保全を前提にし、観光開発や観光活動による観光資源や環境の破壊に対して修復作業を加え、観光地域の需要を計算して、空間上あるいは時間上の制限を含めた観光資

源の保護に努める必要がある。

ウ よりよい観光地域形成のために、人材育成は欠かすことができない。現在、内モンゴルでは、観光産業に勤めている多くの人が観光関係の専門教育を受けていない。現時点では、内モンゴルの3つの高等学校で観光学専攻分野が設立されている。ところが、その学生募集人数は少なく、卒業生の就職率は100%に達している。内モンゴル観光産業の高度な人材ニーズに対して、現在の人材育成の規模では十分に対応することはできない。観光地域の開発、運営、宣伝、環境保全などの諸問題を解決するためにも、今後、観光に関する専門知識のある有能な人材の育成に取り組むべきである。

エ 内モンゴルの観光イメージとして、多くの観光客は草原観光である。あるいはそれだけしかないと思いがちである。草原観光は、内モンゴル観光の最大のテーマであることは間違いないが、それにしても、草原観光以外の諸々の観光資源や観光商品に対して、あまりにも認識されていないのが現状である。それは、観光情報が偏っていることの証である。本研究で明らかにしたように、内モンゴルは草原をはじめ、森林、湖沼、古跡、砂漠、民俗風情など広域にわたり、数多くの観光資源が存在している。これらの観光資源を宣伝し、その魅力を全国あるいは世界中に発信すべしである。そのため、内モンゴルの行政をはじめ、観光産業側からの観光情報発信が必要であり、メインテーマとしての草原観光とサブテーマとしてのその他の観光資源を合わせて観光イメージ形成に努力するほか、他の地域との連携が必要とされるであろう。

オ 内モンゴルの観光には、観光客数の季節的偏りがみられる。これを打開するために、新たな観光資源を作り出す、あるいは観光シーズン以外の時期に資本投下をして各種のイベントや誘致活動を行う必要がある。また、従来の「みる観光」から「する観光」への転換が重要視されるべきであり、たとえば砂漠冒険、スキーなどの夏季以外にも楽しめることのできる観光資源に対し、利用しやすい環境整備が必要とされる。

## 引用文献

- 井口貢編(2002)：『観光文化の振興と地域会社』、ミネルヴァ書房、258p.  
北川宗忠(2002)：『観光・旅の文化』、ミネルヴァ書房、310p.  
平凡社編(2008)：『ベーシックアトラス中国地図帳』、平凡社地図出版、96 p.  
山村順次(1990)：『観光地域論』、古今書院、334p.  
内モンゴル自治区地図製印院(2007)：『内モンゴル自治区地図帳』、中国地図出版社、354p.  
内モンゴル統計年鑑編集会(1989～2009)：『内モンゴル統計年鑑』、中国統計出版社。  
中国統計年鑑編集会(2009)：『中国統計年鑑2009年』、中国統計出版社  
馬勇・余冬林・周霄(2008)：『中国旅行文化史綱』、中国旅行出版社、425p.

## 引用 URL

内モンゴル観光局資料：<http://www.nmgtour.gov.cn/index.asp>、(2009/12/31 アクセス)

# A geographical research concerning tourist area in Inner Mongolian

CHEN Changjiang

Key Words: Inner Mongolian, tourist area, prairie tourism, regional development